

レースって良いよね
第15回「方言」の巻

ハウゲン…今国内で噂の某、法源じゃなくて。

誰もが程度の差こそ有れど、生まれ育った土地やつながりのある地方の方言というものを持っている。かくいう私はれっきとした純関西人で、俗に言われる関西弁をホーム言語としている。

もし、私の知り合いの中でこのページをご覧になった中には「えっ!?!」と感じる人もいると思う。何故なら、私は初対面の人には勿論、普段心を許した人間や地元の親友と喋る以外は標準語を話しているからだ。

ひと通り関東なまりで話したのち、「実は京都出身なんだよねえ。。。」と告白するとタイガイの人は目を丸くしてくれる。実はこの瞬間が楽しくて仕方ない。

裏を返せば、それだけ関西人は関西なまりを払拭し切れないということで、そしてまた私の話す言語もある程度、上手い具合に使いこなせている証拠とも請謁ながら考えている。

関西弁(京都弁)を完全に関東弁にスイッチするには、それはもう血のにじむような努力を要した。何しろ、あらゆる単語のイントネーションから語尾の言い回しに至るまで違うトコだらけなのだから。

更に、より自然に関東弁を話すために方言の種類も地域や世代による違いなど、それなりに研究した。結果、より自然に多国籍ぶりを発揮できる言葉として{横浜近郊}の言葉を自分の言葉として固定するに至る。

ところで、関西には(正確には近畿には)関西標準語というものがある。別に学校で習ったりはしないが、京都、大阪、神戸などこの地方のそれぞれの人間が入り交じる際に使われる言葉がそれである。

つまり、地方独特の許容幅の無い単語や語尾を省き、言語の境目となる特長をぼかすようにして、要は角を丸くした言葉が関西標準語なのだ。

話が前後するが、いわゆる関東地方で使われる関西ならぬ、関東標準語というものがあるとすればそのイメージに最も近いのが横浜近郊にあるというのが私の解釈だ。

何故、関東なまりを話すのかを説明し忘れた。理由は大きく2つある。ひとつは「スマートに見える」点、そしてふたつめは「冷静でいられる」点である。

「スマートに見える」というのには実は、古巣のウエストで語り継がれる伝説ともなっている逸話がある。

ある日、鈴鹿サーキットへスポーツ走行しに来た東北出身のとあるFJドライバーの話。

最終コーナーから立ち上がって来て、何やらバラ・バラ・バラララ・・・、とエンジンをばらつかせて第一コーナーに入るマシンがいる。燃料系か? それとも点火系が悪いのか?? 様々な憶測がピットサイドで飛び交う。

やがて、かのドライバーがピットインして来た。その余りにも異常なエンジン音に該当チーム関係者ならずともその動向を見守っていたのである。

メカニックがマシンに駆け寄り、見るからに慌ただしく対応に迫られている。そして遂にドライバーはおもむろにヘルメットを脱ぎ、一息ついてから周囲に叫んだ。

「コリヤだあ～みだあ!、エンズンがあまあわんねッ!!」

……それを聞いた瞬間、鈴鹿サーキットの(少なくとも周りにいた野次馬達の)時間が凍りついたという。この伝説を聞いて以来、私の脳裏には「レース屋は標準語」という持論が出来てしまったのである。別に関西弁でもそれなりにおかしくは無い。

しかし、だ。よく言われるように「漫才みたい」とか「真剣みが足りない」ってのもそうだが、非日常であるレースの場面をよりシリアスに「演出」するには標準語がうってつけなのだ。

こんな冗談ばい理由はともかく、最も大きな利点がある。それは、「関西弁⇒関東弁」という一連の翻訳作業を脳内で行うことで、ホンの僅かな、瞬間的なタイムラグが生じる。

これにより、どんなに感情が高揚していたとしても冷静にキチンと言葉を選び、平静を保っていられるのだ。一見怒っているような口調の時でさえ、実はすこぶる冷静なのである。

レースの現場ではどれだけ冷静でいられるかが大きな鍵になる場合が多い。データの解析、状況の把

握、全て次々変化する現実を的確に処理しなくてはならないのだ。

ただし、弊害がある。いつもこんな調子でいると、どうやら普段の生活においても冷静で居過ぎるくらいがある。つまり、もっと人間的な感情に任せて発言したり、行動したりしても良いはずなのだ。

とりあえず今のところ、心を許せる友人や知人のおかげで、崖っぷちでギリギリ人間としてのバランスをとっているといっても良いのかもしれない。